

# 工学系研究科建築学専攻所蔵 旧備品台帳 (二)

## 旧工部美術学校所蔵資料

角 田 真 弓

### 一 はじめに

前稿<sup>1)</sup>において建築学専攻所蔵の旧備品台帳より旧工部美術学校所蔵品が含まれていると考えられる石膏像、寒水石彫刻の目録を紹介した。そこで本稿では、同じく旧工部美術学校所蔵資料が含まれると考えられる四項目を引き続き紹介したい。なお、建築学専攻へと引き継がれた経緯、旧備品台帳の説明に関しては、前稿で述べていることから割愛する。

### 二 目録の紹介

#### (一) 画手本

「ミ」印「画手本標本」と分類され、備品番号は三一まで、明治二二年四月一日付で二七件、二五年二月三日付で四件登録されている。臨本、手本と銘打たれた著名な絵画の複製、粉本が大半を占める。このうち、「ミ10」にフォントナージュ直筆の手本が含まれるが、手本であるためか「価格」は一九枚で五、二〇四円と他に比べ必ず

しも高額ではない。また、解剖書が明治二二年と二五年の二期に分かれ登録されており、かつ価格が大きく異なる点から、この二期に登録された解剖書は同一ではないと考えるのが妥当であろう。

#### (二) 芸術参考図

「シ」印「芸術参考標本」と分類され、明治二二年四月一日付より昭和一七年七月二三日付まで、ほぼ毎年のように登録が続き、備品番号は二七六に及ぶ。前項目「ミ」印が「画手本標本」と分類されているのに対し、「芸術参考標本」と分類された「シ」印は、分類名どおりに取ると、手本つまり模写対象ではなく、参考資料ということになる。しかし、「シ8」「シ9」には前項「ミ」印同様解剖図が挙げられており、台帳のみでは、なぜ異なる項目に登録されたのか不明である。この解剖図以外にも明治二二年に登録された一四品目は、「ミ」印「画手本標本」の品目と同類であると考えられるものが多く、区分された明確な要因はわからない。単なる事務的な問題の可能性もあることから、目録情報のみでの判断は難しく、双

方含め検討する必要がある。

明治二七年六月から三八年までに登録された一九品目は、すべて写真帳である。日本建築や美術品の写真帳が大半を占めるが、明治三三年一月に納入された三点（「シ24古代彫刻物写真」）「シ25画手本参考用写真」「シ26近世油画写真」は前後の写真帳とは異なり、国外美術の参考資料と考えられる。

また、明治三八年六月には写真家小川一眞<sup>三</sup>より「北京城内写真」が寄贈されている。明治三十三年に起きた義和団事変<sup>三</sup>の翌年、列国連合軍により占領されていた北京の「故宮」調査が工科大学建築学科助教の伊東忠太<sup>四</sup>、大学院生の土屋純一<sup>五</sup>、助手の奥山恒五郎、そして写真家小川一眞により行われた。そもそも、この伊東らによる建築調査と小川の調査は異なる計画で始まった。東京帝国大学工科大学建築学科では、当初三三年末に北京城への調査派遣を計画するが、費用の問題で中止となる。さらに翌三四年三月には欧州留学中であった武田五一<sup>六</sup>を帰路途中で北京へ立ち寄らせようとするが、手続きが間に合わず断念せざるを得なかった。ようやく五月に至り、土屋と奥山を派遣する手筈が整い、さらに伊東の派遣が命ぜられ実現へと近づく<sup>七</sup>。一方、当時東京府知事であった岡部長職は、軍隊慰問で訪れた紫禁城に感銘し、知人である小川に創建当初の姿を残す紫禁城を撮影させることを計画していた。調査実現のため文部大臣に働きかける過程において、双方の計画を知ることとなり、結果、小川が帝国大学からの派遣という形で実現することとなる。しかし小川の経費を負担することに大学、文部省ともに難色を示したため、

結局東京帝室博物館は、撮影した種板と印画を博物館に納めることを条件として、経費の負担をする。この時に撮影した種板三三四点三五二枚、印画、絵図そして伊東忠太による写真解説は、現在なお東京国立博物館が所蔵している<sup>八</sup>。

さらに、この時納められた調査写真全三五二枚の写真のうち一七二枚が、明治三九年六月に伊東の解説とともに、東京帝室博物館より『清国北京皇城写真帖』と題され、五〇〇部刊行された<sup>九</sup>。しかし後年の小川自身の話によると、実際に撮影を行ったのは全部で四三五枚であったという。これらの写真は日本に帰国後、枢密顧問官への観覧を経て<sup>一〇</sup>、原板は博物館へ寄付し、建築の方の写真は、菊池等の手によって工科大学へ納付された<sup>一一</sup>。

備品台帳「シ」項目には、この写真帖発刊の一年前である明治三八年に二種類の北京城写真帳が、撮影者である小川一眞より寄贈されている。目録によると、「シ35」は「金印」、「シ36」は「銀印」と異なる印が付けられていたことが解る。「金印」は博物館に納められた原板と同じ三五二枚、「銀印」は一組八三枚であり、双方を足すと、小川の言う全撮影枚数四三三枚と等しくなることから、「シ35」「シ36」は、この清国北京城調査の際に撮影された写真帳であると考えられ、特に「銀印」は博物館に収められた写真以外の写真である可能性が高い。

明治四〇年以降に納入されている品目は、國華社や審美書院をはじめとする出版社や刊行会による、国内の複製絵画史料が大半を占めている。これら複製史料の出版は、明治二二年に刊行された雑誌

『國華』が先駆けと言えるであろう。「美術は国の精華なり」「国民と共に邦家の精華を發揮せんと欲する」<sup>三</sup>という提言で始まるこの雑誌『國華』は、文化財概念の普及に貢献するとともに、古美術や古建築の複製を木版、写真版やコロタイプ印刷で掲載してゆく。その後明治三八年頃には『國華』は経営難に至り、発刊当初のメンバーである岡倉天心が経営より手を引くこととなるが、代わるように主幹に加わった瀧精一も、複製物を作成することで広く普及させることが重要であると説く<sup>三〇</sup>。これにより、多くの複製物が世に広まることとなる。ここに挙げられている絵画史料は、この『國華』に続く近代複製出版物と位置付けられるもので、当時の出版状況や印刷技術を知る上でも非常に興味深い。また、建築学科がこれほどまでに複製絵画史料を「芸術参考標本」として購入していることは、特筆すべき点であろう。

### (三) 油絵

「ク」印「油絵標本」と分類され、明治二四年一〇月一五日に一点、翌二六年一〇月一〇日に七点が登録される。点数も少なく、かつ納入時期も限られているのは、工科大学造家学科（建築学科）において、カリキュラム上油絵を描くことはなかったからであろう<sup>四〇</sup>。「ク2上野不忍ノ池ノ図」、「ク6芝文照院表門ノ図」が高額であることに目を引く。

### (四) 自在画

「コ」印「自在画額面類標本」と分類され、明治二六年一〇月一〇日に六点、三〇年六月二五日に一点登録される。油絵同様点数

は少なく、納入時期も限られているのは同様の理由からと考えられる。「ク」印が油絵であるのに対し、こちらは油彩以外の水彩、木炭画などが挙げられている。フォンタネージュの自在画二点が高額である。

### 三、工部美術学校における物品購入と売却

ここで、まず工部美術学校における物品の購入と売却に関する記録を、『工部省 美術 自明治九年至全十五年』<sup>四五</sup>より抜粋してみたい。

明治 九年一月二七日 彫刻学需要ノ製土ヲ伊国ジェーヌ府ニ

購ス

一〇年二月一日 伊太利アルバートル石灰十キントヲ同

国ニ購ス

一二年 八月二日 彫刻需要品ヲ英国ニ購ス

一三年 四月二六日 画学用シエロームエハルク挿筆画手本

初歩外十三種ヲ伊国ニ購ス

一四年 一月二四日 解剖書ヲ購ス（野外）

当然のことながら、前稿で紹介した石膏像しかり、工部美術学校で所蔵する物品はこれだけではなく、書籍を含め既に多数が確認されている<sup>四六</sup>。全体像の把握が不可能であることから、ここに記載された物品とそれ以外の違いは、現状では判断ができないが、ここに記載された備品購入は学校の公式な行為であることは確かである。このうち、「シエロームエハルク挿筆画手本初歩外一三種」と「解

「剖図」は、本稿で紹介する「ミ」印「画手本標本」、「シ」印「芸術参考標本」に含まれている可能性が非常に高い。

一方、彫刻科が廃止となった明治一五年六月以降に行われた物品の売却や寄贈に関する記載は以下のとおりである。

- 明治一五年 七月 五日 同人（ラグーザ・筆者注）ノ請求ニ依リ彫刻場製スル所ノ彫刻写真帖一帖ヲ贈与ス、是同人奉職中生徒ニ教授、製造セシ物品ノ写真ナリ
- 九月 六日 彫刻場備品ノ内、諸器械ノ建築用見本類、彫刻ノ為メ要用ナルモノヲ工部省營繕局ニ交付ス
- 一四日 彫刻用残余ノ粘土伊国産ヲ元教場中ニ蔵蓄セシヲ卒業生徒依リ其難得ノ物ナルヲ以テ、之ヲ売与セラレン事ヲ請フ、許可ヲ得テ、粘土英斤凡千二百斤廉価ヲ以テ之ヲ売付ス
- 二五日 曩キニ東京大学画学教場ノ依頼ニ応シ、彫刻数種ヲ摸造シ、未タ成ルニ至ラスシテ閉場セシヲ以テ、及チ其嘗テ製造セルモノ、無代価ヲ以テ東京大学ニ交付ス
- 十月 四日 許可ヲ得テ彫刻場製造品無代価ヲ以テ之ヲ博物館ニ付シ、同館ノ陳列品トナス

二一日 彫刻場備品ヲ營繕局ニ交付ス、但甲乙二種ヲ分チ、甲ハ無代価トシ、乙ハ原価三割引ノ価ヲ以テ之ヲ交付ス  
（読点筆者）

まずラグーザは帰国にあたり、生徒の和服姿の写真<sup>七</sup>とともに、生徒作品を撮影した写真帳を求めている（七月五日）。次に、東京大学図学教場へ「摸造」彫刻を無償で納める（九月二五日）。明治一五年当時、東京大学には博物館があり、理学部各学科の標本や模型などが陳列されていたが、教場の依頼で作成されたこの彫刻は、博物館の陳列品ではなく、教材と考えるのが妥当であろう。コーネル大学で建築を専攻した小島憲之は、帰国後の明治一四年一〇月に東京大学理学部講師として着任、翌一五年一二月に教授となり、兼担する予備門において用器画を、理学部において図学、機械図のほか、造営学（建築学）を担当する。摸造彫刻が具体的にどのようなものを指すのか不明であるが、小島の担当教科で使用した可能性をふくめ検討する必要があるであろう<sup>一八</sup>。東京大学予備門は明治一九年に第一高等中学校となるが、小島も第一高等中学校教諭となり、現在の東京大学教養学部へと引き継がれる。事実、教養学部図学教室には第一高等中学校の図学模型などが引き継がれていることから<sup>一九</sup>、これら摸造彫刻も同様に引き継がれた可能性が考えられる。一方、帝室博物館へは「製造品」を納めている（二〇月四日）。東京大学図学教場に納めたのは「摸造」つまり「複製」に対し、帝室博物館へ納めたものは「製造品」と記し、どちらも工部美術学校で

制作されたものにかかわらず明確に区別をしていることから、帝室博物館へ納めたのは単なる既存の石膏の複製ではないと考えるのが妥当であろう<sup>二〇</sup>。さらに面白いことに、彫刻場備品のうち建築用見本類などを同じ工部省内の営繕局に交付しているが、移管ではなく一部は有償で売却をしている（九月六日、一〇月二一日）。

先の購入過程同様、ここに記されている以外にも、物品は売却や寄贈された可能性は高い。現在の状況から判断すると、これら売却や寄贈された物品以外の所蔵品の大半が、同じ工部省管轄であった工部大学校へと移管されたと考えるのが妥当であろう。

#### 四、教材としての備品

次に、これら所蔵品が実際の教育課程の中でどのように活用されていたのかを整理するため、まず、金子一夫氏の先行研究<sup>二一</sup>より、簡単に工部美術学校のカリキュラムに触れておきたい。

彫刻科	画学科		予科
ラゲーズ	サン・ジョヴァンニ期 (実習) 風景人物初歩→風景人物上等→石膏写生→風景写生→(基礎学) 幾何学→遠近法→飾画→論理影法→解剖学	フォンタネージ期 ↓造家図↓論理影法↓実地影法↓論理実地遠近法↓水画 臨画(模写)↓石膏人物(半身)写生(手本模写)↓石膏人物(立像)写生(手本模写)↓油画(木偶人写生)↓人物手足写生(手本模写、実物写生)↓黒灰筆画(人物)写生↓鉛筆風景写生↓油画風景写生	
風景額類↓石膏製人物→大理石彫刻初歩飾物	初歩画↓飾物画↓獸類画↓人物画 石膏屏土製飾物初歩→石膏製上等飾物→石膏製獸類→石膏製		

画学科におけるフォンタネージの実技指導は臨画から写生へ、手本から石膏像、人物へと段階を経て方法や題材が変化する原則があった。つまり画学科では、実際の人物や石膏像を対象とせず、臨本(手本)を模写することから始められた。特にフォンタネージ期においては、画学科の石膏デッサンが見られないことから、石膏デッサンが行われていなかった可能性が高い。つまり、画学科における美術教育の基本は臨本に支えられていたといえる。事実、フォンタネージの風景自在画の工部美術学校生徒による模写は確認されており<sup>二二</sup>、ほぼ等寸で忠実に模写されたこれらデッサンをみると、いかに臨本の模写を重要視していたのか明らかであろう。

#### (二) 工科大学造家学科

では、これら所蔵品を引き継いだ工科大学造家学科において、どのような使われ方をしていたのであるか。前稿では講義と担当教員の整理を行ったので、それを踏まえ、本稿では具体的な資料を用いて検討したい。

金子氏により、工科大学造家学科在学中の大沢三之助<sup>二三</sup>による大熊氏廣<sup>二四</sup>の卒業製作「破牢」、もしくははこの作品のモデルと考えられるヴェーラ作「スパルタクス」のデッサンが存在することは既に指摘されている<sup>二五</sup>。実は、この大沢の「破牢」デッサン以外にも、工科大学造家学科を明治二六年卒業した塚本靖<sup>二六</sup>、二七年卒業の大沢三之助、野口孫市<sup>二七</sup>によるデッサンが、明治三〇年二月九日に当時の東京美術学校(以下美校とする、現東京藝術大学)に納められている。造家学科を持たない美校に彼らのデッサンが納められた経

緯を検討するために、当時の美校と造家学科の関わりを整理した  
い<sup>二八</sup>。

美校と造家学科の関わりは古く、明治二六年二月より九月まで伊  
東忠太、その後明治二九年一月まで塚本靖、その後明治二九年一二  
月まで関野貞、再度塚本靖がそれぞれ「建築裝飾術」担当の嘱託教  
員となる。このように目まぐるしく変わるのは、美校側の意向では  
なく、教員を務めていた工科大学造家学科卒業者達の都合であった。

明治二六年の伊東から塚本への交代は、伊東が平安神宮（平安遷都紀  
年殿）技師として京都に赴任するため、二九年一月の塚本から関野へ  
の交代は、塚本が日光廟修繕調査へ赴くため、一二月の関野から塚本  
への交代は、関野が奈良県技師として赴任することが内定したためで  
あった<sup>二九</sup>。この建築裝飾術の講師依頼は、当初は岡倉天心と伊東の関  
係から始まったのであるが、講師が変わろうとも継続した。

一方この時期の美校における大きな変化は、明治二九年七月に工  
藝図案家と建築裝飾図案家の育成を目的とする図按科が設置され、  
九月より授業が開始されたことであろう。塚本は新たに開設された  
図按科における建築裝飾図案の担当者となり、建築裝飾史と建築装  
飾術を担当した。翌明治三〇年三月には大沢三之助が「建築裝飾製  
図」授業嘱託として美校に雇われる。恐らくは図按科二年に設けら  
れていた「建築裝飾術」において実習を教えていたのであろう<sup>三〇</sup>。  
つまり、図按科の教育は塚本の全体構想のもと、大沢との実技指導  
で始められた。このことから、東京藝術大学所蔵の工科大学造家学  
科生徒のデッサンは塚本もしくは大沢の仲介により、新たに設置さ

れた図按科の教材として購入されたと考えられる。

ここで同時期に登録された大沢の「破牢」デッサン以外に目を転  
じてみると、現在建築学専攻で所蔵が確認されている石膏像のデッ  
サンと思われるものが、数点確認できる。（表1、図1〜4）さら  
に、大沢によるトルソデッサン（図5）は「102ベストカプア」（図  
6-1）の正面デッサンであり、工部美術学校生徒のトルソデッサ  
ン（図7）は同石膏の背面（図6-2）を描いていることがわかる。  
さらに、塚本による石膏デッサン（図8）は、曾山幸彦の『デュオ  
ニッス』（図9）と同一画題を描いていることが確認できる。工部  
美術学校においてフォンタネージ直筆画以外にも写真や臨本を手本  
として模写が行われていたことはすでに指摘がされており、清水重  
敦氏により具体例も指摘されている<sup>三一</sup>。デュオニッス像は当専攻の  
旧備品台帳の記載、実物ともに確認されておらず、両図の構図、陰  
影、サイズもほぼ同一であることから、この画題となつている石膏  
像は実物ではなく、写真もしくは臨本であると考えられる。  
つまり、石膏像は工部美術学校廃校後、備品を引き継いだ工科大  
学造家学科においても教材として活用されており、かつ臨本も同様  
に教材として活用されていたといえるであろう。



図1 大沢三之助  
「石膏デッサン」  
（西洋画 834）  
東京藝術大学所蔵



図2  
「143 小児ノ頭」



図8 塚本靖「石膏デッサン」  
(西洋画 831)  
東京藝術大学所蔵



図7 工部美術学校生徒  
「トルソー」  
(西洋画 534)  
東京藝術大学所蔵



図5 大沢三之助  
「石膏デッサン」  
(西洋画 842)  
東京藝術大学所蔵



図3 大沢三之助  
「石膏デッサン」  
(西洋画 840)  
東京藝術大学所蔵



図9 曾山幸彦「ディオニソス」  
(西洋画 506)  
東京藝術大学所蔵



図6-2  
「キ102 ベストカ  
プア」背面

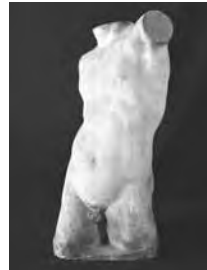


図6-1  
「キ102 ベストカ  
プア」正面



図4 「(無題)」

表1 東京藝術大学所蔵工科大学造家学科生徒デッサン

作者	作品名	所属	製作年月日	卒業年	学年	自在画講師	所蔵品番号	目録年
塚本靖	石膏デッサン	工科大学造家学科	記載なし	明治26年			西洋画 827	明治30年買入
塚本靖	石膏デッサン	工科大学造家学科	記載なし	明治26年			西洋画 828	明治30年買入
塚本靖	石膏デッサン	工科大学造家学科	M24/6/29	明治26年	1年	曾山幸彦	西洋画 829	明治30年買入
塚本靖	石膏デッサン	工科大学造家学科	M24/3/2	明治26年	1年	曾山幸彦	西洋画 830	明治30年買入
塚本靖	石膏デッサン	工科大学造家学科	M24/11/18 か	明治26年	1年	曾山幸彦	西洋画 831	明治30年買入
塚本靖	石膏デッサン	工科大学造家学科	記載なし	明治26年			西洋画 832	明治30年買入
塚本靖	石膏デッサン	工科大学造家学科	M24/9/30	明治26年	2年	曾山幸彦	西洋画 833	明治30年買入
大沢三之助	石膏デッサン	工科大学造家学科	M25/9/30	明治27年	2年	松岡 壽	西洋画 834	明治30年買入
大沢三之助	石膏デッサン	工科大学造家学科	M25/2/15	明治27年	1年	松岡 壽	西洋画 835	明治30年買入
大沢三之助	石膏デッサン	工科大学造家学科	M25/2/26	明治27年	1年	松岡 壽	西洋画 836	明治30年買入
大沢三之助	石膏デッサン	工科大学造家学科	M24/12/24	明治27年	1年	曾山幸彦	西洋画 837	明治30年買入
大沢三之助	石膏デッサン	工科大学造家学科	M25/5/15	明治27年	1年	松岡 壽	西洋画 838	明治30年買入
大沢三之助	石膏デッサン	工科大学造家学科	M24/10/18	明治27年	1年	曾山幸彦	西洋画 839	明治30年買入
大沢三之助	石膏デッサン	工科大学造家学科	M27/2	明治27年	3年	松岡 壽	西洋画 840	明治30年買入
大沢三之助	石膏デッサン	工科大学造家学科	M25/4/29	明治27年	1年	松岡 壽	西洋画 841	明治30年買入
大沢三之助	石膏デッサン	工科大学造家学科	記載なし	明治27年			西洋画 842	明治30年買入
野口孫市	石膏デッサン	工科大学造家学科	記載なし	明治27年			西洋画 843	明治30年買入
野口孫市	石膏デッサン	工科大学造家学科	記載なし	明治27年			西洋画 844	明治30年買入
野口孫市	石膏デッサン	工科大学造家学科	記載なし	明治27年			西洋画 845	明治30年買入
不明	石膏デッサン	不明	記載なし				西洋画 846	明治30年買入

「所蔵品番号」は東京藝術大学美術館所蔵品番号を示す。

「西洋画 846」は作者不明であるが、塚本靖、大沢三之助、野口孫市の石膏デッサンと同時期に買入られたことから、工科大学造家学科生徒のデッサンである可能性が高いため、表に含めた。

### (三) 曾山幸彦の画塾 大幸館

さらに東京藝術大学の所蔵資料に目を戻すと、工部美術学校生徒による「小児頭部」(西洋画526、明治一四年)と高木背水の「小児頭部」(西洋画555、明治二七年)、前者の「修道女」(西洋画529、明治一四年)と高木の「修道女」(西洋画552、明治二七年)、「男裸体」(西洋画533、年代不明)と高木の「男裸体」(西洋画551、明治二七年)はどれも同じ手本をもとに描かれたデッサンである可能性が非常に高い。工部美術学校廃校後、曾山は工部大学校、工科大学造家学科に、急逝する明治二五年まで勤め上げる一方、自らが明治一七年に設立した美術学校に旧工部美術学校の備品を借り出し、教材としていた<sup>三〇</sup>。曾山(大野)の没後、門下生は同じく工部美術学校出身の堀江正章を講師に招き、大幸館と改称し、塾は存続されることとなるが、高木背水が入門を許可されたのは曾山(大野)の没後であったという。高木のデッサンはどれも明治二七年の作であり、この大幸館での習作であると考えられる。曾山の開設した塾は工部美術学校での教育内容をそのまま引き継いでおり<sup>三一</sup>、その後継である大幸館でも同様の教育が行われていた。ここに挙げた工部美術学校生徒のデッサンは、高木自身のデッサンとともに東京藝術大学へと納められた経緯を考えると、高木のデッサンは曾山の時代に貸与された工部美術学校生徒のそれが塾での手本(教材)となり、それをもとに製作された可能性も考えられる。

建築学専攻には、現在のところ石膏像や臨本は部分的にせよ確認

されているが、工部美術学校生徒の習作と思われるデッサンは一枚も確認されていない。結果として、工部美術学校を直接引き継いでいない美校に、さらに後継学校である東京藝術大学へと多数引き継がれていることは<sup>三四</sup>、工学教育機関である工科大学と美術教育機関である美校の関係からすれば当然ともいえるであろう。

### 五、その後の行方と現存史料の紹介

前稿で紹介した石膏像、寒水石彫刻は明治四五年に学内他部局への移管、廃棄と物品整理が行われていたが、今回紹介する項目には昭和一〇年と四五年の二期の移動が記されている。まず昭和一〇年三月一日付で油絵標本五点が本部へ移管される。これは石膏像や寒水石彫刻同様、調度品としての移管措置であろう。この時期に移管が行われた可能性として、大正一二年の関東大震災による校舎再建が考えられる。東京帝国大学医学部医科学教室(現総合図書館敷地)より上がった火の手は、北へと炎を進め、法学部八角講堂(現法文一号館敷地)まで焼き尽くした。工学部敷地には火の手が及ぶことはなかったが、当時建築学科が位置した辰野金吾設計の工学部(工科大学)本館は、この震災で使用不能となる。現在建築学専攻のある工学部一号館は、工学部(工科大学)本館の敷地に、当時の教授であった内田祥三設計のもと、昭和四年着工、一〇年に竣工している。震災による被災は免れたが、建て替えが必要となった工学部は、建築学科を一時期、南側に位置する列品館などに移転した。この建て替えに伴う引っ越しの過程で移管が行われたと考えられ



る。

この移管された油彩画五点のうち、「ク6芝文照院表門ノ図」が高額であることに注目したい。この油彩画がサン・ジョヴァンニの「芝徳川家靈廟前の図」である可能性が考えられないだろうか。サン・ジョヴァンニは明治一四年三月に上野の現東京国立博物館の敷地で開催された第二回内国勸業博覧会へ「工部卿山尾庸三像」「夫人三絃演奏図」とともに「芝徳川家靈廟前の図」を出品していた<sup>三三</sup>。同展覧会にはラグーザの「日本婦人」像のほか、藤雅三、曾山幸彦、松室重剛三人による「弓術ノ図」三点をはじめ美術学校生徒作品が出品されている<sup>三四</sup>。このうち、曾山による「弓術ノ図」が建築学専攻に現存していること、同じく専攻所蔵のラグーザ「欧州婦人半身浮彫額」が第一回内国勸業博覧会出品作品と思われること<sup>三五</sup>、旧備品台帳に記載されている工部美術学校教師の作品には高額な価格が付けられていることが多いこと<sup>三六</sup>から、サン・ジョヴァンニの油彩画が工科大学へと引き継がれた可能性は否定できないであろう。

また、油画標本「ク2上野不忍ノ池ノ図」、自在画額面類標本「コ1ポインタネージ氏風景自在画」「コ2ポインタネージ氏風景自在画」、画手本標本「ミ10フォンタネジー氏鉛筆画手本」の四点は昭和四五年四月九日と一二月二七日に東京国立博物館へ移管されている。これらの資料は隈元謙次郎氏により既にフォンタネジーの作品として紹介がされていた<sup>三九</sup>。その経緯も踏まえ、学科での維持に限界もあつたことから、当時の建築学科教授により移管手続が進められたという。なお、この際に移管された鉛筆画手本には、先に挙げた工部美

術学校生徒の手本であった素描が含まれている。(表2)

最後に、現在建築学専攻で所蔵が確認されている絵画をいくつか紹介したい。油彩画「ク4西本願寺飛雲閣ノ図」は現存するが、銘記がないため作者、作成年は不明である。(図10) 自在画額面標本の「コ3風景自在画」および「コ4風景自在画」に該当する風景画も、ともに現存する。この二点は旧備品台帳に「コ1」「コ2」同様、後年、結末・備考欄に「(註) 国立博物館に保管転換」と書き加えられているが、現在も建築学専攻で所蔵することから、恐らくは間違いであろう。「コ5人物自在画」は先に挙げた曾山幸彦の「弓術ノ図」を指していると伝えられる。しかし、約二〇年前に修復を行いその際額装を改めたため、備品番号等の記載は見当たらず、現時点では比定は難しい。(図11) また、「コ7梅ノ図額面」は工部大  
学校造家学科教師であつたジョサイア・コンドルの作であると伝えられる。



図10 「西本願寺飛雲閣ノ図」



図11 曾山幸彦「弓術ノ図」

表2 建築学科より東京国立博物館へ移管されたフォントナー作品

作品名	サイズ (cm)		旧備品台帳	隈元本図番号	列品番号	備考
不忍池	51.5 × 73.4	油絵	ク2	三	A-11687	中央下部にサイン
風景	85.5 × 108.5	木炭	コ1/コ2	六	A-11685	右下にサイン、年号
夕陽 (不忍池)	85.0 × 108.0	木炭		七	A-11686	
風景	12.6 × 23.1	素描		ミ10	一一	A-11688
風景	15.3 × 20.4	素描	ミ10	一二	左下にサイン	
耕作図	14.6 × 24.0	素描	ミ10	一三	左下にサイン	
風景	15.7 × 18.6	素描	ミ10	一四	左下にサイン	
風景	14.3 × 20.6	素描	ミ10	一五	左下にサイン	
羅馬水道趾	12.8 × 24.0	素描	ミ10	一七	右上隅にサイン	
廃趾	13.1 × 20.0	素描	ミ10	一八	左下にサイン	
瀧図	14.9 × 22.0	素描	ミ10	一九	左下にサイン	
水辺風景	13.1 × 18.6	素描	ミ10	二〇		
風景	13.3 × 19.8	素描	ミ10	二一		
牧人	14.2 × 24.0	素描	ミ10	二二		
山湖遠望	11.9 × 19.6	素描	ミ10	二三		
湖辺風景	12.7 × 19.3	素描	ミ10	二四		
風景	17.2 × 11.5	素描	ミ10	二五		
吹笛	19.3 × 14.0	素描	ミ10	二六	左下にサイン	
風景	20.0 × 12.6	素描	ミ10	二七		
山路	19.6 × 12.8	素描	ミ10	二八	左隅にサイン	
建築内部	28.9 × 22.0	素描	ミ10	二九		
湖畔	17.6 × 11.4	素描	ミ10	三〇		

「隈元本図番号」は、隈元謙次郎『明治前期来朝伊太利亜美術家の研究』の図版番号を示す。  
「列品番号」は東京国立博物館列品番号を示す。

六、おわりに

前稿に引き続き、旧備品台帳に記載のある項目のうち、旧工部美術学校所蔵品が含まれると考えられる項目を紹介した。現存遺構の調査が十分ではないため断言はできないが、旧備品台帳に記載されている石膏像、画手本ともに、明らかに旧工部美術学校の備品が含まれており、工部美術学校廃校後も工科大学造家学科（建築学科）の備品であり、ある時期まで教材として活用されていた事実が明らかとなった。一方、平成二二年三月には東京国立博物館所蔵のラグーザ関連資料が紹介された<sup>四〇</sup>。博物館の旧台帳に記載されている石膏像のほか、ラグーザが寄贈した複製銅版画、石版画と、建築学専攻の旧備品台帳に記載されている石膏像や臨本との関係は、どう位置付けられるのであろうか。双方の旧台帳が明らかとなったことで、今後の検討の可能性が大きく広がったと言えるであろう。

近年、今回紹介した項目に該当するいくつかの標本が確認されており、今後調査を進めてゆく上で、具体的内容を明らかにしてゆきたい。

一 拙稿「工学系研究科建築学専攻所蔵旧備品台帳（一）旧工部美術学校資料」『東京大学史紀要』第二八号、平成二二年

二 米国留学後の明治一八年に写真館「玉潤館」を開設する。二一年の畿内宝物調査をはじめ、全国の宝物調査に参加する一方、二二一年には『國華』創刊にも関わる。四三年には写真家として初めて帝室技芸員となる。（一八六〇～一九二九）

三 日清戦争後、中国清朝末期におきた反キリスト教的排外運動。

四 明治二五年帝国大学工科大学造家学科卒業後、大学院へ進学。

三〇年一月同校講師となるが、三二年六月に解任。七月より造神宮技師兼内務技師となり、三二年七月より同校助教を兼任、三八年教授となる。同校定年退官後、東方文化学院東京研究所研究員などを務める。(一八六七～一九五四)

五 明治三三年東京帝国大学工科大学建築学科卒業後、大学院進学。奈良県技師、国宝保存会委員、名古屋高等工業学校教授、校長を歴任。(一八七五～一九四六)

六 明治三〇年帝国大学工科大学造家学科卒業後、大学院へ進学。三二年同校助教を経て、欧州留学後の三六年京都高等工芸学校教授となる。名古屋工業大学校長、京都帝国大学教授を歴任。(一八七二～一九三八)

七 奥山恒五郎「北京紫禁城の裝飾に就て(承前)」『建築雑誌』一八二、明治三五年二月

八 関紀子「北京城写真受け入れの経緯について」『紫禁城写真展』平成二〇年、東京都写真美術館

九 三井圭司「『清国北京城写真帖』について」『紫禁城写真展』平成二〇年、東京都写真美術館

一〇 岡塚章子「建築の記憶」『建築の記憶』平成二〇年、東京都庭園美術館

一一 前掲注九

一二 「國華」『國華』第一号、明治二二年、國華社

一三 「美術品の模造」『國華』一九三号、明治三九年、國華社。瀧村

一と美術教育の関係は、増記隆介「複製画」と美術教育』『東京大学創立百二十周年記念東京大学展 学問の過去・現在・未来 第一部学問のアルケオロジー』平成九年、東京大学総合研究博物館に詳しい。

一四 拙稿「教育から読み解く工学・建築・美術認識」『関野貞アジア踏査』平成一七年、東京大学総合研究博物館／東京大学出版会

一五 国立公文書館所蔵

一六 『工部美術学校旧蔵図書仮目録』、『東京大学工学部建築学科蔵工部美術学校旧蔵資料』昭和六一年、明治美術研究会

一七 佐野昭「旧工部美術学校の彫刻部」『明治洋画史料 懐想編』昭和六〇年、中央公論美術出版

一八 『東京大学法理文三学科一覽』、『東京大学予備門一覽 自明治一五年至一六年』、金子一夫『近代日本美術教育の研究 明治時代』平成四年、中央公論美術出版

一九 『図る人・描く人』平成一九年、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部駒場博物館

二〇 『東京国立博物館紀要』第四五号、平成二二年

二一 金子一夫「工部美術学校における絵画・彫刻教育」『近代日本美術教育の研究 明治・大正時代』平成一一年、中央公論美術出版

二二 福田徳樹「習画期作品の性格」『工部美術学校生徒習画作品展』昭和六〇年、東京藝術大学美術資料館

二三 明治二七年帝国大学工科大学造家学科卒業後、大学院へ進学。

同校講師のほか、東京美術学校講師を務める。明治四〇年～四三年、文部省の命により欧州留学。(一八六七～一九四五)

三〇 明治九年工部美術学校彫刻科入学、明治一三年には助手を任命される。工部美術学校廃校後も生涯肖像彫刻、記念碑の制作を続ける。(一八五六～一九三四)

三二 前掲注二一

三六 明治二六年帝国大学工科大学造家学科卒業。東京美術学校講師を経て工科大学造家(建築)学科助教授、教授を歴任。帝国芸術院会員。(一八六九～一九三七)

三七 明治二七年帝国大学工科大学造家学科卒業後、大学院へ進学。卒業後通信技師を経て、住友家(住友本店)建築技師を務める。代表作は、中之島図書館。(一八六九～一九一五)

三八 大西純子「関野貞と東京美術学校」『関野貞アジア踏査』平成一七年、東京大学総合研究博物館／東京大学出版会論文、『東京美術学校一覽』、『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇第一卷』昭和六二年、東京藝術大学

三九 前掲注二八大西論文、前掲注一四

三〇 『東京美術学校一覽』

三一 清水重敦「建築写真と明治の教育 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵古写真解題」『東京大学創立百二十周年記念東京大学展 学問の過去・現在・未来 第一部学問のアルケオロジ』平成九年、東京大学総合研究博物館

三三 堀江正章「明治時代の西洋画」、高木背水「大野幸彦と堀江正章」

『明治洋画史料 懐想編』昭和六〇年、中央公論美術出版

三三 前掲注三二

三四 村田哲朗「藝術資料館蔵・工部美術学校生徒作品の蒐集経緯について」『工部美術学校生徒習画作品展』昭和六〇年、東京美術大学藝術資料館

三五 隈元謙次郎「明治初期来朝伊太利亜美術家の研究」昭和一五年、三省堂(昭和五三年八潮書店より復刻)。「芝徳川家霊廟前の図」は会期後半に未完成のまま出陳されたという。

三六 『第二回内国勸業博覧会出品目録』明治一四年

第二回(明治一四年開催)内国勸業博覧会

第三区

第壹類「シセロン半身像(大理石)」「八角形花瓶(大理石)」「手水鉢(大理石)」「欧州小童半身浮彫(大理石)」「リーズ氏半身浮彫(大理石)」「欧州婦人半身浮彫(大理石)」「エルキエル」ノ足(大理石)」「ミケランジ」ノ頭(大理石)」「カノツノ足」「欧州婦人半身像(大理石)」「円形花瓶(石膏)」「ベニユストハチカン半身像(石膏)」「千五百年代パンノウ(石膏)」「アリアンス半身(石膏)」「小児ノ像(石膏)」「天井円飾(石膏)」「ベニユストメシメ浮彫(石膏)」「人物浮彫(石膏)」「ベニビエル氏半身浮彫(石膏)」

第三類「人物画(油画)」「風景画(油画)」「人物赤裸画(コンテ)」「人物画(コンテ)」「風景画(鉛筆)」「上野博物館遠景之図」

なお「日本婦人」はこの出品目録には記載されていないことから、必ずしもこの目録は出品物がすべて記載されているわけではない。

三七 『大見世物 江戸・明治の庶民娯楽』平成一五年、たばこと塩の博物館

三八 拙稿注一掲載の目録より、「キ14半身浮彫楕円額」、「キ26欧州婦人半身浮彫額」「キ96コンテススケル半身像」、および本稿掲載目録「ク2上野不忍ノ池ノ図」、「コ1ポインタネージ氏風景自在画」「コ2ポインタネージ氏風景自在画」

三九 前掲注三五

四〇 前掲注二〇

東京藝術大学所蔵資料調査にあたり、同大学美術館古田亮准教授、芹生春菜助教、吉田朝子研究員に協力賜りました。記して感謝いたします。

(つのだ まゆみ 東京大学大学院工学系研究科 建築学専攻)

表3 ミ印 画手本標本

年月日	納入	番号	品目	員数	価格	結末・備考	追記
明治22年4月1日		ミ1	泰西各派臨本	65	13,270		
明治22年4月1日		ミ2	模型臨本	80	11,790		
明治22年4月1日		ミ3	飾画手本	150	32,900		
明治22年4月1日		ミ4	動物画手本(上)	20	29,000		
明治22年4月1日		ミ5	動物画手本(下)	50	28,206		
明治22年4月1日		ミ6	大成風景臨本	100	48,465		
明治22年4月1日		ミ7	鉛筆画風景臨本	88	17,007		
明治22年4月1日		ミ8	風俗画手本	59	28,575		
明治22年4月1日		ミ9	裸体臨本	24	9,293		
明治22年4月1日		ミ10	フォンタネジー氏鉛筆画手本	19	5,204	昭和45年12月27日 東博へ保管転換	二重線
明治22年4月1日		ミ11	名家画稿写真	157	67,206		
明治22年4月1日		ミ12	デュコレー氏画手本	27	8,141		
明治22年4月1日		ミ13	中学校用画手本初歩	13	4,319		
明治22年4月1日		ミ14	古大家粉本	24	7,914		
明治22年4月1日		ミ15	画手本雑集	6	0,940		
明治22年4月1日		ミ16	木炭画風景臨本	44	13,552		
明治22年4月1日		ミ17	飾画手本	10	4,005		
明治22年4月1日		ミ18	風俗写真	30	9,680		
明治22年4月1日		ミ19	解剖図	2冊	76	4,520	
明治22年4月1日		ミ20	同解	2	2,900		
明治22年4月1日		ミ21	建築物写真	303	129,900		
明治22年4月1日		ミ22	レネイサンス式建築裝飾写真	150	70,030		
明治22年4月1日		ミ23	写真雑集	28	12,000		
明治22年4月1日		ミ24	写真帖	9	55,000		
明治22年4月1日		ミ25	遠近法図	129	2,322		
明治22年4月1日		ミ26	石版摺図面	20	0,100		
明治22年4月1日		ミ27	解剖書	1	2,900		
明治25年2月3日		ミ28	解剖書図解	21	1,000		
明治25年2月3日		ミ29	解剖書	1	0,500		
明治25年2月3日		ミ30	解剖書図解	1	2,500		
明治25年2月3日		ミ31	クラシック式建築裝飾	29	5,800		
				1660			

記述がある欄のみ書き出した。  
各品目に後年書き加えられた印および線は右欄に追記として記した。

表4 シ印 芸術参考標本

年月日	納入	番号	品目	員数	価格	結末・備考	追記
明治22年4月1日		シ1	ビンチェンツツカムチーニ氏採集 レネイサンス式建築裝飾総集	100	58,000		
明治22年4月1日		シ2	古代彫刻物画手本	36	12,700		
明治22年4月1日		シ3	草木画手本	12	8,880		
明治22年4月1日		シ4	ラフワエルロ模本	30	13,320		
明治22年4月1日		シ5	パチカン裝飾図	14	6,355		
明治22年4月1日		シ6	パチカン裝飾画	18	5,345		
明治22年4月1日		シ7	クラシック式建築裝飾細部	24	13,460		
明治22年4月1日		シ8	解剖図	38	4,840		
明治22年4月1日		シ9	解剖図解	1	1,450		
明治22年4月1日		シ10	ラフワエルロ及グキドーレニ宗教 画写真	16	5,236		
明治22年4月1日		シ11	飾壺写真	30	4,520		
明治22年4月1日		シ12	草木写真	28	13,000		
明治22年4月1日		シ13	建築物内外裝飾写真	51	19,547		
明治22年4月1日		シ14	石膏製彫刻物写真	65	24,350		
明治22年11月18日		シ15	室内裝飾図	26	19,890		
明治26年2月1日		シ16	茶席起絵図	1	6,800		
明治26年2月1日		シ17	茶席起絵図	1	6,800		
明治27年2月13日		シ18	ライ形藝股彫物図	1	2,200		○
明治27年6月8日		シ19	建物写真帖	1冊	3,450		○
明治28年11月19日		シ20	奈良地方各寺院建物及宝物写真	1組大判17 小判156	10,350		
明治30年6月25日		シ21	工科大学写真	1組8枚	見積1,440		
明治30年11月17日		シ22	奈良地方諸寺院建物及宝物写真	1組42枚	4,830		
明治32年4月29日		シ23	奈良及京都地方神社仏閣建物及宝 物写真	1組44枚	6,600		
明治33年1月24日		シ24	古代彫刻物写真	102枚	33,985		
明治33年1月24日		シ25	画手本参考用写真	71枚	26,824		
明治33年1月24日		シ26	近世油画写真	19枚	6,241		
明治33年4月30日		シ27	奈良及京都地方神社仏閣建物及宝 物写真	1組82枚	13,530		
明治33年12月15日		シ28	奈良及京都地方神社仏閣建物及宝 物写真	1組46枚	7,360		
明治34年月日		シ29	奈良及京都地方神社仏閣建物及宝 物写真	1組56枚	8,848	合冊	○
明治35年2月19日		シ30	奈良及京都地方神社仏閣建物及宝 物写真	1組31枚	4,898	合冊	
明治35年5月24日		シ31	宝物写真	1組2冊	26,480		○
明治35年11月28日		シ32	奈良及京都地方神社仏閣建物及宝 物写真	1組41枚	6,150		○
明治36年12月9日		シ33	古代建築絵画及彫刻帖	1冊49枚	9,200		○
明治37年12月7日		シ34	日本古代美術写真帖	1冊93枚	15,950		
明治38年6月6日		シ35	北京城内写真(金印)	16冊352枚	550,000	小川一真寄贈	
明治38年6月6日		シ36	北京城内写真(銀印)	1組83枚	54,800	小川一真寄贈	
明治38年11月22日		シ37	日本古代美術写真帖	1冊63枚	11,800		
明治40年3月5日	吉川書店	シ38	鑑賞録	1冊	10,000		
明治40年3月5日	真美書院	シ39	浮世画派画集(第一卷、第二卷)	2冊	100,000		○
明治40年3月5日	真美書院	シ40	光琳画集	5冊	90,000		○
明治40年3月5日	真美書院	シ41	元信画集	2冊	20,000		○
明治40年4月17日	宮内幸太郎	シ42-80	室内裝飾写真	39枚	45,240		
明治40年5月24日	真美書院	シ81	元信画集	1冊	10,000		○
明治40年6月24日	真美書院	シ82	支那名画集	2冊	50,000		○
明治40年8月28日	真美書院	シ83	浮世絵流画集(第四卷)	1冊	50,000		
明治40年9月16日	佐藤正三	シ84	日本古代美術写真帖	1冊	9,380		○
明治40年10月21日	真美書院	シ85	六波羅行幸絵巻	1巻1冊	6,500		○
				770	1905		
明治41年3月4日	審美書院	シ86	浮世絵画集(第五卷)	1冊	50,000		
明治41年3月4日	審美書院	シ87	雪舟山水絵巻	1巻	21,800		
明治41年3月4日	審美書院	シ88	東瀛珠光第一冊	1冊	19,000		
明治41年4月14日	審美書院	シ89	東瀛珠光第二冊	1冊	19,000		
明治41年4月14日	審美書院	シ90	浮世絵画集三巻	1冊	50,000		
				775	1910		
明治41年12月1日	審美書院	シ91	鳥羽僧正絵巻一巻	1	23,000		○
明治41年12月10日	審美書院	シ92	東瀛珠光第三巻	1	19,000		
明治42年3月28日	審美書院	シ93	東瀛珠光第四巻	1	19,000		
明治42年5月12日	審美書院	シ94	東瀛珠光第五巻	1	19,000		
明治42年6月29日	審美書院	シ95	雪舟画集	1	25,000		○
				780	1915		

年月日	納入	番号	品目	員数	価格	結末・備考	追記
明治43年2月21日		シ96	東瀛珠光第六卷	1	21,000		
明治43年4月18日		シ97	雪舟画集笔輯	1	20,000		○
明治43年4月18日		シ98	国宝及特別保護建造物画帖	1部3帙	60,000		
明治43年7月7日		シ99	支那古銅器集	1冊	28,000		
				782	1921		
大正2年1月13日		シ100	金銅仏写真集	1冊	4,500		
大正2年3月17日		シ101	雅邦集一、二	2冊	70,000		○
大正2年6月21日		シ102	宗達画集	1冊	7,500		
					1925		
大正4年6月16日		シ103	西域考古図譜	1部2冊	70,000		
					1927		
大正4年11月30日		シ104	源氏物語絵巻	1巻3卷	22,000		
大正4年12月10日		シ105	頭塔石仏拓本	12枚	10,000		
大正5年4月2日		シ106	東洋美術大観13	1冊	25,000		
大正5年4月2日		シ107	東洋美術大観14	1冊	25,000		
					1944		
大正6年3月3日		シ108	浮世絵版画傑作集第四集	1冊	6,000		
大正6年3月3日		シ109	浮世絵版画傑作集第二集	1冊	8,500		○
大正6年3月3日		シ110	浮世絵版画傑作集第三集	1冊	7,500		
大正6年3月3日		シ111	浮世絵版画傑作集第一集	1冊	6,000		○
大正6年9月18日		シ112	浮世絵版画傑作集第五集	1冊	6,000		
大正6年9月18日		シ113	浮世絵版画傑作集第六集	1冊	6,000		
大正6年10月22日		シ114	浮世絵版画傑作集第七集	1冊	4,500		
					1951		
大正7年4月17日		シ115	浮世絵大観	1部1冊	32,000		○
大正7年4月22日		シ116	三十六歌仙	1冊	10,000		○
大正7年5月23日		シ117	職人絵尽	1部3冊	9,000		○
大正7年5月28日		シ118	浮世絵版画傑作集第八集	1部1冊	6,500		○
大正7年5月28日		シ119	中尊寺大観	1冊	10,000		
大正7年6月10日		シ120	南画集	1部3冊	28,000		○
大正7年9月25日		シ121	東洋美術大観15	1冊	25,000		
大正7年11月1日		シ122	浮世絵版画傑作集第九集	1冊	6,500		
					1963		
大正7年11月12日		シ123	(胎藏田図様) 仏教図像集古	1巻	15,000		
大正8年1月17日		シ124	粉河寺縁起	1巻	32,000		
大正8年6月3日		シ125	浮世絵版画逸品集第十	1冊	6,000		○
大正8年6月21日		シ126	文晁筆東海道勝景	1冊	25,000		○
大正8年6月23日		シ127	平治物語絵詞(信西の巻)	1巻	45,000		
大正8年9月24日		シ128	別尊雜記関係1.2	1巻	10,000		
大正8年9月24日		シ129	別尊雜記関係5	1巻	15,000		
大正8年9月24日		シ130	四種護摩印形及金剛界清尊契印	1巻	5,000		○
大正8年9月24日		シ131	戒壇院屏絵	1巻	10,000		
大正8年9月24日		シ132	浄瑠璃寺吉祥天及厨子絵	1巻	10,000		
					1973		
大正9年2月17日		シ133	浮世絵版画傑作集第十一	1冊	6,500		
大正9年2月17日		シ134	浮世絵版画傑作集第十二	1冊	6,500		
					1975		
大正9年5月14日	内村	シ135	日本埴輪図集	2冊	60,000		
大正9年5月31日	田口	シ136	華嚴經五十五所絵巻	1巻	40,000	辰野奨学資金購入	
大正9年5月31日	田口	シ137	因果経絵巻 白二至四	3巻	100,000	辰野奨学資金購入	
大正9年6月25日	川村	シ138	別尊雜記図像三四	1巻	20,000		
大正9年6月25日	川村	シ139	胎藏図像上	1巻	15,000		
大正9年6月25日	川村	シ140	胎藏図像下	1巻	20,000		○
大正9年7月6日	渋谷	シ141	春日権現靈驗記 第一巻	1巻	39,000	辰野資金	
大正9年7月6日	渋谷	シ142	後三年合戦絵巻 上	1巻	40,000	辰野資金	
大正9年10月11日	渋谷	シ143	襖絵選集上下	2巻	100,000	辰野資金	
大正9年10月11日	渋谷	シ144	醍醐寺靈宝集	1巻	15,000	辰野資金	
大正9年10月26日	渋谷	シ145	絵師草紙上	1巻	40,000	辰野資金	
					1990		
大正9年11月22日	渋谷	シ146	当麻曼荼羅縁起	1巻	45,000		
大正9年12月4日	渋谷	シ147	病草紙	1巻	20,000		
大正9年12月6日		シ148	別尊雜記7・8	1巻	25,000		○
大正9年12月6日		シ149	陶磁器百選	57枚	11,400		○



年月日	納入	番号	品目	員数	価格	結末・備考	追記
大正 10年 2月 15日		シ 150	春日権現靈験記 第二卷	1 卷	44,000		○
大正 10年 2月 21日		シ 151	後三年合戦絵詞 中卷	1 卷	40,000		
大正 10年 4月 15日		シ 152	理趣経曼荼羅	1 卷	10,000		
大正 10年 4月 22日		シ 153	後三年合戦絵詞 下卷	1 卷	40,000		
大正 10年 6月 1日		シ 154	五本十二神将	1 卷	15,000		
大正 10年 6月 16日		シ 155	法然伝絵詞略	1 帙	30,000		
大正 10年 6月 16日		シ 156	年中行事絵巻 壹	1 帙	25,000		○
大正 10年 6月 16日		シ 157	一遍上人絵伝	1 帙	20,000		○
大正 10年 7月 4日		シ 158	明和劇場図	1 軸	15,000		
大正 10年 7月 4日		シ 159	倭絵逸話集	10 枚	25,000		○
				2069			
大正 10年 12月 6日		シ 160	別尊雜記第六	1 卷	20,000		
大正 11年 1月 13日		シ 161	四種護摩炉形及胎藏外部	1 卷	15,000		
大正 11年 1月 14日		シ 162	織物含名物裂	1組(15枚)	50,000		
大正 11年 2月 24日		シ 163	仏教美術資料	1帙(119枚)	76,000		
大正 11年 3月 2日		シ 164	華嚴縁起 第一卷	1 卷	15,000		
大正 11年 4月 15日		シ 165	金剛界諸尊形像	1 卷	20,000		
大正 11年 4月 28日		シ 166	石山寺絵 第一	1	13,500		
大正 11年 5月 9日		シ 167	雲州余彩	1 帙 2 冊	60,000		○
大正 11年 5月 23日		シ 168	大唐五山諸堂図	1 組 2 卷	180,000		
				2080			
大正 11年 5月 27日	渋谷	シ 169	華嚴縁起 第二卷	1 卷	13,500		
大正 11年 6月 15日	渋谷	シ 170	源氏物語	1 卷	20,000		
大正 11年 6月 15日	渋谷	シ 171	石山寺絵 第二卷	1 卷	13,500		
大正 11年 10月 6日	水上	シ 172	仏教図像集古五部心観	1 卷	25,000		
大正 11年 11月 13日	渋谷	シ 173	華嚴縁起 第三卷	1 卷	13,500		
大正 11年 11月 13日	渋谷	シ 174	石山寺縁起 第三卷	1 卷	13,500		
大正 11年 11月 13日	渋谷	シ 175	小野御幸絵巻	1 卷	10,000		
				2087			
大正 12年 1月 15日	渋谷	シ 176	華嚴縁起 第四卷	1 卷	13,500		
大正 12年 2月 8日	中幸男	シ 177	菅田宗廟縁起	1 卷	20,000		
大正 12年 3月 12日	内村	シ 178	雛か、美	1 部(2冊)	20,000		
大正 12年 3月 12日	大塚	シ 179	大山祇神社大鑑	1 冊	15,000		
大正 12年 3月 12日	大塚	シ 180	伝願愷之女史歳図巻	1部(10枚)	10,000		
大正 12年 4月 18日	渋谷	シ 181	春日権現記 第三卷	1 卷	54,000		
大正 12年 4月 18日	渋谷	シ 182	石山寺縁起 第四卷	1 卷	13,500		
大正 12年 4月 27日	水上	シ 183	仏教図像集古胎藏諸尊形像 上	1 卷	17,500		
大正 12年 4月 27日	水上	シ 184	仏教図像集古胎藏諸尊形像 下	1 卷	17,500		○
大正 12年 5月 19日	信古書院	シ 185	古瓦集	2 冊	12,000		
大正 12年 5月 21日	文星堂	シ 186	京大文学部陳列館考古図譜	1 冊	17,500		
大正 12年 6月 22日	洪洋社	シ 187	美術工芸大観 一	1 冊	35,000		
大正 12年 6月 22日	洪洋社	シ 188	美術工芸大観 二	1 冊	35,000		
大正 12年 6月 22日	東洋美術研究会	シ 189	仏教美術資料 第二期	1 帙	76,000		○
大正 12年 7月 9日	大塚稔	シ 188	徽宗皇帝模様練図写真	1 組(3枚)	5,000		
大正 12年 7月 9日	渋谷	シ 189	華嚴縁起 第五卷	1 卷	13,500		
大正 12年 7月 20日	村上	シ 190	瓜哇古面譜	1 帙	40,000		
大正 12年 10月 15日	古谷	シ 191	獲古図録	1 部(2冊)	25,000		
大正 12年 10月 19日	宮田	シ 192	襖壁紙文様集 第一輯、第二輯	1 部(2冊)	10,000		○
大正 12年 10月 20日	渋谷	シ 193	光悦宗達桜山吹屏風絵	1 帙	15,000		
大正 13年 7月 10日	渋谷	シ 194	伊勢新名所歌合絵巻	1 卷	25,000		
大正 13年 7月 10日	若江範長	シ 195	工芸美術聚英 第一キ分	1部(12冊)	48,000		○
大正 13年 7月 10日	若江範長	シ 196	工芸美術聚英 第二キ分	1 部(3冊)	12,000		○
大正 13年 9月 20日	黒田為次郎	シ 197	日本建築参考図	1 組 2 卷	13,000		
大正 13年 9月 25日	高見沢作三郎	シ 198	浮世絵	1 組 8 枚	48,800		
大正 13年 9月 25日	平井為次郎	シ 199	日本木版画粹	1 組 30 枚	9,900		
大正 13年 10月 10日	若江範長	シ 200	工芸美術聚英 第四輯、第五輯 (第二キ分)	1 部(2冊)	8,000		
大正 13年 11月 8日	若江範長	シ 201	工芸美術聚英 第六輯 (第二キ分)	1 冊	4,000		
				2115			
大正 13年 11月 12日	古谷幸太郎	シ 202	天狗草紙	1 卷	18,000		
大正 13年 11月 12日	古谷幸太郎	シ 203	紫式部絵巻	1 卷	15,000		
大正 13年 11月 12日	古谷幸太郎	シ 204	一遍上人絵伝	1 卷	20,000		
大正 13年 11月 12日	古谷幸太郎	シ 205	寂覚草紙絵巻	1 卷	15,000		
大正 13年 11月 18日	関字一郎	シ 206	彩華 第一輯	1 冊	3,500		
大正 13年 11月 27日	洪洋社 高梨由太郎	シ 207	美術工芸大鑑 第二期分	1 冊	35,000		

年月日	納入	番号	品目	員数	価格	結末・備考	追記
大正13年11月27日	洪洋社 高梨由太郎	シ208	美術工芸大鑑 第二期分	1冊	35,000		
大正13年11月27日	山下幸三	シ209	襖壁紙文様集 第一期第一輯	1部	5,000		○
大正13年11月27日	山中定次郎	シ210	埃及希臘波斯古陶金石大鑑	1冊	30,000		○
大正13年11月27日	山中定次郎	シ211	古代埃及列地大鑑	1冊	21,500		
大正13年11月27日	山中定次郎	シ212	支那古美術大鑑	1冊	20,000		
大正13年12月7日	小川晴暘	シ213	室生寺大鑑	1冊	30,000		
大正13年12月7日	小川晴暘	シ214	泉涌寺来迎廿五菩薩大観	1冊	16,000		○
大正14年5月13日	古屋幸太郎	シ215	こぎれ集 第一ヨリ第三迄	1部	7,500		○
大正14年5月13日	古屋幸太郎	シ216	伴大納言絵巻	1巻	45,000		
大正14年5月13日	小川晴暘	シ217	法隆寺大観 第一輯、第二輯	1部	40,000		○
大正14年5月13日	小川晴暘	シ218	大和古美術大観 第一集~第十七集迄	1部	95,000		○
大正14年6月25日	関字一郎	シ219	彩華 第二輯ヨリ第五輯迄四冊	1部	14,000		
大正14年7月6日	三浦秀之助	シ220	閻婆仏蹟ボロブヅウル 解説書付三帙	1部	120,000		
大正14年7月6日	大塚稔	シ221	東洋歴史参考図譜 第一輯ヨリ五輯迄五輯	1部	20,000		○
大正14年7月6日	田村壮次郎	シ222	三春人形	1帙	2,500		
大正14年7月11日	遠山喜助	シ223	天神縁起絵巻 四ッ切六十三枚・八ッ切五枚	1組	65,500		○
大正14年7月31日	大塚稔	シ224	仏陀伽耶	1部	10,000		
大正14年9月28日	山本湖舟	シ225	古代染織図録	1冊	25,000		
大正14年9月28日	山本湖舟	シ226	漆匠長寛	1冊	10,000		
大正14年11月30日	関字一郎	シ227	彩華 第六輯ヨリ第八輯迄三冊	1部	10,500		
大正14年11月30日	和田幹男	シ228	仏教美術資料 三期分一帙	1部	72,000		
大正14年12月1日	嶋津福太郎	シ229	浮世絵	1組16枚	96,000		
大正14年12月15日	洪洋社 高梨由太郎	シ230	美術工芸大観 第三期分	1冊	35,000		
大正15年3月8日	小川晴暘	シ231	大判、室生寺大観 一卷ヨリ三巻迄	1組	36,000		
大正15年3月8日	小川晴暘	シ232	広隆寺大観 一卷ヨリ五巻迄	1組	30,000		
大正15年3月8日	小川晴暘	シ233	印度美術写真集 十二輯迄	1組	24,000	中村奨学資金より	
大正15年4月16日	古屋幸太郎	シ234	平家納経	1帙	100,000		
大正15年5月5日	青山米治	シ235	亜東印画集	1冊	16,600		
大正15年6月15日	関字一郎	シ236	彩華 第九輯ヨリ第十二輯迄四冊	1部	14,000		
大正15年6月17日	熊谷直之	シ237	襖壁紙文様集 自式輯至四輯	1部	15,000		○
				2151			
大正15年8月28日	青山米治	シ238	亜東印画集 第二輯	1冊	16,600		
大正15年12月4日	大塚稔	シ239	東洋歴史参考図譜 自六輯至拾輯	1部	20,000		○
大正15年12月9日	関字一郎	シ240	彩華 自十三輯至十六輯四冊	1部	14,000		
昭和2年1月15日	嶋津康雄	シ241	上代染織真譜 第一輯ヨリ第六輯迄	1部	30,000		
昭和2年1月15日	小川晴暘	シ242	室生寺大観 (大判) 第七、八、九輯分帙共	1部	21,000		
昭和2年2月21日	小川晴暘	シ243	印度美術写真集 (第13輯ヨリ24輯迄)	1組	30,500		
昭和2年6月24日	関字一郎	シ244	彩華 自十七輯至二十一輯五冊	1部	17,500		
			計	2158			
昭和2年11月22日	青山米治	シ245	亜東印画集 第三輯	1冊	16,600		
昭和3年1月11日	洪洋社 高梨由太郎	シ246	美術工芸大鑑 第四期分1-10	1冊	25,000		○
昭和3年5月17日	関字一郎	シ247	彩華 自二輯至二七輯六冊	1部	21,000		
昭和3年6月16日	高梨由太郎	シ248	美術工芸大鑑 第四期分11-12	1部	5,000		○
昭和3年10月10日	田野倉治三郎	シ249	亜東印画集 第四輯	1冊	7,500		
昭和4年1月17日	田野倉治三郎	シ250	亜東印画集 第五輯	1冊	16,500		一重線
昭和4年2月25日	関字一郎	シ251	彩華 自二八輯至三三輯六冊	1部	21,000		
昭和4年9月14日	関字一郎	シ252	彩華 自三四輯至三六輯三冊	1部	10,500		
昭和4年9月14日	江藤哲二	シ253	国風大観 (写真六十枚)	1部	9,500	十二月廿六日七、八輯 三円也、五年五月六日九、十、十一、十二輯 六円也、.500表紙代	○
			昭和四年拾壹月五日現在計	2167			
昭和5年2月6日	田野倉治三郎	シ254	亜東印画集 第六輯	1冊	16,560		
昭和5年2月6日	大塚稔	シ255	東洋歴史参考図譜 自十一輯至十四輯	1	16,000		○
昭和5年11月29日	江藤哲二	シ256	国風大観 (写真五十枚)	1	7,500	自十三輯至十七輯分	

年月日	納入	番号	品目	員数	価格	結末・備考	追記
昭和6年1月22日	田野倉治三郎	シ 257	亜東印画集 第七輯	1	15.600	自六十六回至七十七回分	一重線
昭和6年6月26日	上泉徳弥	シ 258	国風大観(写真四十枚)	1	6.000	自拾八至貳拾壹輯分	
昭和6年6月30日	大塚稔	シ 259	東洋歴史参考図譜 第十五輯	1	4.000		○
昭和7年1月20日	田野倉治三郎	シ 260	亜東印画輯 第八輯	1	16.600	自七十八回至八十九回分	
昭和7年2月20日	上泉徳弥	シ 261	国風大観(写真九十枚)	1	13.500	自廿二輯至三十輯分	一重線
昭和7年3月22日	大塚稔	シ 262	法隆寺壁画 帙入額式枚付	1組	100.000		
昭和7年12月5日	上泉徳弥	シ 263	国風大観(写真八十枚)	1	12.000	自三十一輯至三十八輯分	一重線
昭和8年2月1日	田野倉治三郎	シ 264	亜東印画輯 第九輯	1	15.600	自第九十回至第百壹回分	
昭和8年3月23日	上泉徳弥	シ 265	国風大観(写真三十枚)	1	4.500	自三十九輯至四十一輯分	
昭和9年2月22日	田野倉治三郎	シ 266	亜東印画輯(表紙共)	1	16.600	自第百二回至第百十三回分	一重線
昭和9年3月20日	上泉徳弥	シ 267	国風大観	1	6.000	自四十二輯至四十五輯分	
昭和10年2月15日	田野倉治三郎	シ 268	亜東印画輯(表紙共)	1	16.600	自百十四回至百廿五回分	一重線
昭和11年2月15日	田野倉治三郎	シ 269	亜東印画輯(表紙共)	1	16.600	自百廿六回至百三十七回分	一重線
昭和12年3月25日	田野倉治三郎	シ 270	亜東印画輯(表紙共)	1	15.820	自138回至149回分	一重線
昭和13年2月5日	田野倉治三郎	シ 271	亜東印画輯(表紙共)	1	16.200	自150至161輯分	一重線
昭和14年1月31日	田野倉治三郎	シ 272	亜東印画輯	1	15.600	自162至173輯12部	
昭和15年2月10日	田野倉治三郎	シ 273	亜東印画輯	1	15.600	自174至185輯12部	
昭和16年4月25日	田野倉治三郎	シ 274	亜東印画輯	1	21.300	自186至200輯15部	
昭和17年3月24日	野口三郎	シ 275	国宝石山寺縁起 第五卷	1	35.000		
昭和17年7月23日	田野倉治三郎	シ 276	亜東印画輯	1	1.800	自201号至212号(12部)	

記述がある欄のみ書き出した。  
各品目に後年書き加えられた印および線は右欄に追記として記した。

表5 ク印 油絵標本

年月日	納入	番号	品目	員数	価格	結末・備考	追記
明治24年10月15日		ク1	旧謁見所玉座裝飾額面	1	5,000		
明治26年10月10日		ク2	上野不忍ノ池ノ図	1	20,000	45.4.9. 国立博物館へ 保管転換	二重線
明治26年10月10日		ク3	京都三十三間堂ノ図	1	5,000	昭和10年3月11日 本部へ保管転換	二重線
明治26年10月10日		ク4	西本願寺飛雲閣ノ図	1	5,000		
明治26年10月10日		ク5	西本願寺勅使ノ間ノ図	1	5,000	昭和10年3月11日 本部へ保管転換	二重線
明治26年10月10日		ク6	芝文照院表門ノ図	1	10,000	昭和10年3月11日 本部へ保管転換	二重線
明治26年10月10日		ク7	京都八坂神社ノ図	1	5,000	昭和10年3月11日 本部へ保管転換	二重線
明治26年10月10日		ク8	二条城大広間ノ図	1	5,000	昭和10年3月11日 本部へ保管転換	二重線
				8			

記述がある欄のみ書き出した。  
各品目に後年書き加えられた印および線は右欄に追記として記した。

表6 コ印 自在画額面類標本

年月日	納入	番号	品目	員数	価格	結末・備考	追記
明治26年10月10日		コ1	ボンタネージ氏風景自在画	1	見積 50,000	45.4.9. 国立博物館に 保管転換	○ 二重線
明治26年10月10日		コ2	ボンタネージ氏風景自在画	1	見積 50,000	〃	○ 二重線
明治26年10月10日		コ3	風景自在画	1	見積 5,000	〃	○ 二重線
明治26年10月10日		コ4	風景自在画	1	見積 5,000	〃	二重線
明治26年10月10日		コ5	人物自在画	1	見積 5,000		
明治30年6月25日		コ6	黒塗縁人物画額	1	見積 0,700		
明治30年6月25日		コ7	梅ノ図額面	1			

記述がある欄のみ書き出した。  
各品目に後年書き加えられた印および線は右欄に追記として記した。